

# Alice Walker の *The Color Purple* における Womanism と物質性

田 中 美 和

はじめに

Alice Walker は、1983 年に出版された *In Search of Mother's Garden* において、白人女性によって始められた Feminism と区別される、有色人女性のための Womanism を提唱している。その思想は、その前年 1982 年に出版された小説、*The Color Purple* にも表れており、その後続く *The Temple of My Familiar* においても同様である。女性の自立と成長を描くという点においては、1976 年に出版された *Meridian* も *The Color Purple* と同様であるが、この作品は、*The Color Purple* や *The Temple of My Familiar* の明るい色調とは異なり、さらに Walker の掲げる Womanism の要素がほとんど見られない。本稿では、Alice Walker の二つの代表作とも言える *Meridian* と *The Color Purple* 両作品における物質への評価に着目し、その違いから、Womanism の特徴と独自性を考察し、*The Color Purple* が 1983 年にピューリッツァー賞を受賞し、また、より多くの人々に愛されてきた魅力を探る。

## 1. 物質的豊かさ

Alice Walker によって 1982 年に発表された小説 *Meridian* は、社会主義の精神に目覚めた黒人女性 Meridian が、公民権運動が終わってもなお、自身の正義を貫くべく、さまざまな経験を経て成長して行くというものである。Walker がエッセイ “My Father's Country Is Poor” で言及しているように、この小説執筆時の Walker は社会主義思想に傾倒しており、キューバの

フィデル・カストロやチェ・ゲバラを崇拜していた。その影響はこの小説全体を通して窺える。まず、主人公 Meridian は大学で社会主義をテーマに “no one should be allowed to own more land that could be worked in a day, by hand” (122) という考えに基づいた進級論文を書いており、また学友の Ann-Marion とは、社会主義思想について議論を交わしている。このことから、この小説における社会主義思想の占める重要性は高いと言えよう。また、Meridian には「所有する」という意識が薄く、それは彼女の部屋の様子によく表われている。彼女の部屋は母親と友人からの手紙が貼り付けてあるだけで、あとは何もない。

Above and below this strip of letters the walls were of decaying sheetrock, with uneven patches of dried glue as if the original wallpaper had been hastily removed. The sun through a tattered gray window shade cast the room in dim gray light, and as he glanced at the letters — walking slowly clockwise around the room — he had the feeling he was in a cell.  
(9)

私的財産を所有することに価値を置かないという社会主義の精神が、Meridian の生活においても反映されていると言える。

それとは対照的に、*The Color Purple* では、仕事を持ち、財産を増やし豊かな生活をする事、生活を美しくし楽しもうとする様子が多く描かれている。家、室内装飾、服装、食事など、生活全般にわたる描写が細部に渡り生き生きと描かれており、それは物質的豊かさの肯定と言えるだろう。例えば、妹 Netty からの手紙をずっと隠していた Mr. \_\_\_\_ への怒りを鎮めようと、Shug が Celie をメンフィスのへ連れて行くとき、Shug が料理をし、そしてそれを二人で食べる場面は、まさに生きることの根源である「食べる」ことが魅力的に描写されている。

Ham and greens and chicken and cornbread. Chitlins and blackeyed peas and source. Pickled okra and watermelon rind. Caramel cake and blackberry pie.

Us ear and eat, and drink a little sweet wine and beer too.

Then Shug and me go fall out in her room to listen to music till all that food have chance to settle. (217)

また、この作品では、生活を通して、人の心と心が通い合っていく様子も多く描かれている。それは Celie と Mr. \_\_\_\_ の結婚生活においてでさえもである。そもそも Celie と Mr. \_\_\_\_ の結婚には初めから愛は存在しない。しかし、Celie による生活をきちんと整えるという行為は、Mr. \_\_\_\_ の子供たちと姉妹たちからの好感を買う。また、Shug が病気になって Celie と Mr. \_\_\_\_ の家に療養に来たときも、Celie の作る料理が、Shug の心に活力を取り戻させる。また、Shug に勧められて作るようになった Celie のズボンは、それを着ることになる相手の体に合うことを考えて作られる。

I start to make pants for Jack. They have to be camel. And soft and strong. And they have to have big pockets so he can keep a lot of children's things. Marbles and string and pennies and rocks. And they have to be washable and they have to be fit closer round the leg than Shug's so he can run if he need to snatch a child out the way of something. And they have to be something he can lay back in when he hold Odessa in front of the fire. And . . . (220)

この、日々の暮らしの中で誰かの世話をしたり、料理や衣服を作るという Celie の行為には、彼女の相手への思いが託されており、言葉をほとんど発しない Celie の言葉の代わりとなって相手へと届けられる。

また、メンフィスから帰った Celie との仲を改善したい Albert (Mr. \_\_\_\_ の本当の名) は、収集した貝殻を Celie に見せたいという口実のもとに、彼女を家に招く。Celie も彼の本心がわかっていて、それに従うのであるが、ここでは、物がその仲介役となって、人と人の関係をつないでいる。

また *The Color Purple* では、言葉のやり取りのほかに、相手を「見る」という行為から生まれる、愛情に満ちた描写が頻繁に見られる。まず、Celie が Shug に最初に惹かれたのは、彼女の写真からである。Celie はそれに目

を奪われる。このことは、人間が他者に好意を持つための理由として、物理的な要素が重要であることを示している。それ故、Shug が Celie の住む町に楽団を連れてやってくることを知ったとき、Celie はただ Shug の「姿」を見たいと願うのである——“Lord, I wants to go so bad. Not to dance. Not to drink. Not to play card. Not even to hear Shug Avery sing. I just be thankful to lay eyes on her.” (26) また、Celie は彼女と Mr. \_\_\_\_ と Shug の三人関係に関してこうも言う。——“He love looking at Shug. I love looking at Shug. But Shug don’t love looking at but one of us.” (77) また、Henrietta という少女が病気になったとき、彼女について Celie はこう述べている。——“The only thing keep me alive is watching Henrietta fight for her life.” (259) これらのことからわかるのは「見る」という行為がこの小説において愛の表れとして使われており、愛する相手が物理的に存在することを確かめる行為であるということである。これは、物質として生きているからこそ出来る行為であり、また相手の物質性を感じ取り、またそれを確認する行為であると言える。生きているからこそできる行為をこの作品では重要視していると言えよう。

## 2. 人と人の繋がり

先に述べたように、*Meridian* において、主人公 Meridian は物質に対する所有欲をほとんど持っていないが、同じことが人間関係においても見られる。まず、血縁関係内における愛について、*Meridan* と *The Color Purple* では正反対である。Meridian は、二度妊娠している。一度目は、高校生の時の恋人 Eddy との間に出来た子どもである。この子に対して Meridian は愛情を感じる事ができずに、叔母に預ける。二度目は、恋人 Truman との間にできた子どもであるが、妊娠が判った時、Truman が Lynne と恋人関係にあったために中絶してしまう。一方、*The Color Purple* では、主人公 Celie は、父親と思っていた男性（実は義理の父であることが後に判明する）にレイプされてできた子どもに対しても、母親としての愛情を持っている。

その子を町で発見した時、Celie はすぐに自分の子供であるとわかる。

She got my eyes just like they is today. Like everything I seen, she seen, and she pondering it.

I think she mine. My heart say she mine. But I don't know she mine. If she mine, her name Olivia. I embroider Olivia in the seat of all her daidies. I embrody lot of little stars and flowers too. (14)

*Meridian* は愛する人との間にできた子供でも愛情を感じる事ができなかつたり、中絶してしまうのに対し、Celie はレイプという悲惨な経験によって産まれた子供でも、またその子供から引き離された後でも、母親としての愛情をしっかりと持ち続けている。

恋愛関係においても *Meridian* と *The Color Purple* では、両極に分かれている。*Meridian* では、Meridian と Truman の恋愛、Truman と Lynne の結婚は、どちらかの愛の終わりでもって、その関係も終わりを迎えている。それに対し、*The Color Purple* では、Celie と Shug、Shug と Albert (Mr. \_\_\_\_)、Albert の息子の Harpo とその妻の Sofia、Harpo と恋人の Mary Agnes など、恋愛関係が終わっても彼らの人間対人間としての関係は終わることはなく、そこからまた新たな愛が始まったり、友情が芽生えたりと、人と人のつながりが切れることはない。

*The Color Purple* では、愛し合おうと、憎しみ合おうと、人間と人間のつながりは途切れることがなく、否応なしに決められた枠組み、たとえば、夫婦、親子、姉妹、主人と奴隷、という人間の自由意志では変えることのできない枠組みの中で、繰り返される生活と時間の経過を通して、心が通い合っていく様が描かれている。また、Celie と Albert のように、愛し合うとは行かないまでも、人間としての情が湧き、友情へと変わっていく、不条理な関係から生まれる愛を Walker は描いている。

### 3. ニューエイジ思想と Womanism

1983年に出版された Walker のエッセイ集 *In Search of Our Mothers' Garden* において、Walker は Feminism と区別するための有色人女性の在り方として Womanism というものを掲げている。

Womanist 1. From *womanish*. (Opp. of “girlish,” i.e., frivolous, irresponsible, not serious.) A black feminist or feminist of color. [...] Interested in grown-up doings. Acting grown up. Being grown up. . . .

2. Also: A woman who loves other women, sexually and/or nonsexually. Appreciates and prefers women's culture, women's emotional flexibility (values tears as natural counter-balance of laughter), and women's strength. Sometimes loves individual men, sexually and/or nonsexually. Committed to survival and wholeness of entire people, male *and* female. Not a separatist, except periodically, for health. . . .

3. Loves music. Loves dance. Loves the moon. *Loves* the Spirit. Loves love and food and roundness. Loves struggle. *Loves* the Folk. Loves herself. *Regardless*.

4. Womanist is to feminist as purple to lavender. (xi-xii)

この定義の中で、Womanist は “black feminist or feminist of color” と書かれているが、これをそのまま Feminist の有色人女性版というふうに捉えることはできない。というのは、この定義においては、Feminism のような、社会における女性の権利の主張が記されているのではなく、むしろそのことには触れず、人間であれ、自然であれ、この世に存在する全てのものへの愛が記されているからである。この、全ての存在に対する愛、というのは当時広まりつつあったニューエイジ思想と共通する考えであり、Walker もその影響を受けていると言えよう。

そもそもニューエイジ思想とは、1960年代のカウンター・カルチャーから大きな影響を受けており、とりわけ、ヒンドゥー教や仏教など、あるいは、アブラハム・マズローやカール・ロジャーズなどの心理学からの影響が大きいと見られている。(藤本 47) そしてその影響が強く社会に現れる

のは 1970 年代からで、キリスト教に代わる、思想的には宗教性を帯びてはいるが、その構造としては宗教的とは言い難い、あくまでも個人内での霊的成長に向き合うものである。Walker もまた、自身の日記で、アメリカのニューエイジ運動のリーダー的存在と言われる Shirley MacLaine の *Dancing in the Light* (1985) を読んだことを言及していることからわかるように、ニューエイジャーであるとの明確な言及はないとしても、その影響を受けていることは明白であろう。また、1989 年に発表された *The Temple of My Familiar* で、Lissie という女性が自身の前世の記憶を思い出す場面があるが、それが Shirley MacLaine のその小説におけるそれと類似しているということを、Donna Winchell は指摘している。(116) 藤本龍児によれば、このニューエイジ思想は、1970 年代に広くアメリカ社会に広まった宗教的思想ではあるが、その特徴としては、あくまでも個人内での活動であり、従来の宗教のような組織を持たないという。

… 支持者の大半が特定の集団に強い帰属意識をもたないことは確かであって、その実践の仕方が個人主義的な傾向を持っていることに変わりはない。たとえば、ベビーブーマー世代の宗教意識や行動を調査し、アメリカ宗教の現代的変容を考察した研究によれば、現代人のスピリチュアリティへのかかわり方は決して制度的なものではないという。それは、各個人が小さなグループを足場にするもので、たとえグループであっても、長いあいだ顔をつき合わせるようなことはなく、束の間の付き合いでしかないというのである。(48)

*Meridian* は *The Color Purple* 以降の作品とは異なり、作品全体を通して、宗教性はほとんど見られず、主人公は学生時代に出会った社会主義の精神をもとに、正義を貫き続けている。しかし、ニューエイジ思想における、自己の内面の成長はあくまでも、個人の中で行うものという、個人主義的な精神活動は、*Meridian* の精神活動に共通すると言えるだろう。このことは、この小説の最終場面における *Meridian* と Truman のやり取りの中にも窺える。

She was strong enough to go and owned nothing to pack. She had discarded her cap, and the soft wool of her newly grown hair framed her thin, resolute face. His first thought was of Lazarus, but then he tried to recall someone less passive, who had raised himself without help. [...]

“I hate to think of you always alone.”

“But that is my value,” said Meridian. “Besides, all the people who are as alone as I am will one day gather at the river. We will watch the evening sun go down. And in the darkness maybe we will know the truth. (241–42)

Meridian が最終的に至る結論は、社会主義的革命を目指すのはあくまでも Meridian 個人だけで、彼女は他者に彼女自身の思想を強要したり、共に活動することを勧誘したりはしない。そして、今まで築いてきた人とのつながりを捨て、一人新しい世界へと旅立っていくのである。この個人主義的な理念は、社会を構成する人民の協力を必要とする社会主義のそれとは異なり、あくまでも個人内での精神的な改革に留めるニューエイジ思想の影響が見られると言えよう。

また、*The Color Purple* では、その後の作品 *The Temple of My Familiar* にも見られる、キリスト教とは異なる、Walker 独自の神像が示されており、この神は、多くの研究者が指摘している通り、ニューエイジの影響が強く表れていると言えよう。女性シンガー Shug は、神が白人男性だと思っている Celie にこう伝える。

God is inside you and inside everybody else. You come into the world with God. But only them that search for it inside find it. And sometimes it just manifest itself even if you not looking, or don't know what you looking for. [...]

Don't look like nothing, she say. It ain't a picture show. It ain't something you can look at apart from anything else, including yourself. I believe God is everything, say Shug. Everything that is or ever was or ever will be. And when you can feel that, and be happy to feel that, you've found It. (202–203)



この、神がこの世のすべてであるという考えは、ニューエイジ思想の根幹そのものである。Shirley MacLaine によると、ニューエイジ思想は量子論によって裏付けられているという。

Basic to New Age subatomic discoveries is the concept that in the subatomic world — the stuff of the universe — everything, every last thing, is linked. [...]

[...] Since there is no separateness, we are each Godlike, and God is in each of us. We experience God and God experiences through us. We are literally made up of God energy. [...]

[...] If God is love and each of us possesses God within us, then all of us would be happier and more peaceful with one another, recognizing that the more we try to express as God, the more harmony there will be in the world.

That is the basic principle of the New Age. (*Going Within* 100–108)

物理学者たちがこのようなニューエイジ思想を裏付けしたという事実はないものの、MacLaine のこの考えはまさに、Walker の Womanism の、“Loves music. Loves dance. Loves the moon. Loves the Spirit. Loves love and food and roundness. Loves struggle. Loves the Folk. Loves herself.” の信条と共通していることと言えるだろう。ニューエイジ思想と Womanism は、キリスト教におけるような清貧の精神や、社会主義の私有財産制の廃止とは違い、物を愛し、物質的に豊かであることを肯定する。物質を愛し、生活を愛することは、つまりこの世で「生きる」ことを肯定することであると言えよう。しかしながら、*The Color Purple* では、ニューエイジ思想のような徹底した個人主義は見られない。この小説における登場人物たちの内面の成長は、自己の中だけで起こるものではなく、途切れることのない人と人のつながりにおけるコミュニケーションを通して成される。惹かれたり憎しみ合ったり許しあったりして、互いに影響を与えながら精神的に自己の内面が成長していくのである。その点において、Alice Walker の掲げる Womanism はニューエイジ思想とは異なり、それが Womanism の独自性であると

言える。*Meridian* においては、社会主義思想に基づいて、いかに正義を守って生きるべきか、いかに自らが正しいと思う生き方を貫くかが描かれている。しかし、*The Color Purple* に登場する人物たちは皆、何か欠けていたり、偏った考えを持っていたり、過ちを繰り返してしまう人々が描かれている。しかし、その過ちは、悪だとして切り捨てられるのではなく、ともに人生を歩んでいく姿が描かれている。物質への愛を肯定し、他者との間にあるものが愛であろうと、憎しみであろうと、つながりは断たれないことを主張する *The Color Purple* は、*Meridian* における主人公たちの、自己の正義や倫理を守るために人との別れを選ぶ姿勢とは違い、決して完璧ではありえない人間たちが、時の流れとともに、関係を変化させながら、肩を寄せ合って生きていくことを描いている。物質で出来たこの世界を積極的に生き、そしてそれを十分に味わい楽しむという、この生きることへの肯定が、人生に悩み生きる読者たちの共感を呼び、また勇気づけ、魅了している所以となっていると言えるだろう。

#### 引用文献

- MacLaine, Shirley. *Dancing in the Light*. London: Bantam Press, 1985.  
 ——. *Going within*. New York: Bantam Books, 1989.  
 Walker, Alice. *The Color Purple*. New York: Pocket Books, 1982.  
 ——. *In Search of Our Mothers' Garden*. New York: Harvest, 1983: xi–xii  
 ——. “My Fathers' Country Is the Poof.” In *In Search of Our Mothers' Garden*. New York: Harvest, 1983: 199–222  
 ——. *Meridian*. London: Phoenix, 1976.  
 Winchell, Donna. *Alice Walker*. New York: Twayne Publishers, 1992.  
 藤本龍児『アメリカの公共宗教——多元社会における精神性』エヌティティ出版、2009